

第 145 回 鶴見大学図書館貴重書展

華麗なる源氏絵

—尾形月耕の才筆—

【会期】平成29年1月27日（金）～2月28日（火）

【会場】鶴見大学図書館 1階エントランス



講演会 「源氏絵素人談義」

日時

2月22日（水）

14:00～15:00

会場

図書館地下1階ホール

講師

高田信敬（本学文学部教授）

申込不要・入場無料です
直接会場へお越しください

鶴見大学図書館

神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3 電話 045-580-8274

平日 8:50～20:00 / 土曜 8:50～18:00 / 日曜・祝日 閉館

1月27日(金)～2月3日(金)の平日は 21:00 まで開館

源氏物語研究所

後援：紫式部学会・武蔵野書院

やっどめぐりあえた源氏絵

あけましておめでとう存じます。初春の展示を担当するようになって、もう10年以上となりますでしょうか。現在、日本の伝統文化や古典に関心が高まっていますのは、勿論結構な話ではありますが、底の浅い一過性の現象に終わらないためには、世間の流行からひとまず離れて、心静かに、そして楽しく書物と語らうことこそ望ましいかと思えます。

さて源氏物語研究所は、源氏物語とそれに関する良質の資料を収集し、書物に即した調査研究を行い、また広く皆様に公開することを、大きな仕事の柱としております。犀利を装った言説や高級そうな議論は、しばし人目を驚かすことがあっても、すぐに新手と交替していきます。研究所が古典籍収集に努力しますのは、確実に学問を支え、研究を進めるための基盤が、何より書物に求められるからです。しかし今回は、書物ではなく源氏絵のお披露目。いつもと少し趣向を変えまして、近代木版画の見事な達成をお目にかけることといたしました。我が国最高の古典に取り組んだ明治の絵師尾形月耕(1858～1920)の大判錦絵『源氏五十四帖』です。

各巻1図全54枚に総外題を加えた55枚の揃いを、ずっと捜し続けておりましたが、なかなか市場に現れず、中野幸一博士のご所蔵品に羨望の涎を流すばかり。ところが昨年、保存状態の良い完揃いを関西の業者が持っているとわかり、めでたく図書館に入りました(価格は申し上げませんが、かなりのお買い得です)。憧れの佳人にやっど巡り会えた、と言うわけです。

江戸の源氏絵も独自の味わいがあり、明治になってからもその流れを汲む浮世絵は刷られました。しかし月耕の作は、構図・色使い・細部の描写など、清新な造形感覚と高い技倆が随所に看取され、近代日本画の一分野として鑑賞に値するものです。調べてみますと当然粉本が存在し、それとの対比によって、参考とした資料から鮮やかに離陸する絵師の姿が浮かび上がるところ、『源氏五十四帖』には資料追求の醍醐味、研究のおもしろさもあります。ただし、これは学者の勝手な言い分でしょう。皆様にはとにかく展示を楽しんでいただきたく存じます。理屈抜きに、素晴らしいのですから。

平成丁酉青陽下浣日

源氏物語研究所

高田信敬

*企画・解題作成は高田が担当いたしました。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。
また図書館所蔵の資料のみでは不足の箇所には、個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

展示書目

◎は個人蔵

I 典拠を捜す

- 1 総外題 明治28年(1895)
 - 2 桐壺 明治25年(1892)「いとけなき初もとゆひに」
(参考) 絵入源氏物語 桐壺 慶安3年(1650) 跋 承応3年(1654) 刊
 - 3 帯木 明治25年 「かすならぬふせやにおふる」
 - 4 若紫 明治25年 「手につみていつしかも見ん」
 - 5 花散里 明治25年 「たちはなの香をなつかしみ」
(参考) 十帖源氏 卷三 花散里 無刊記
 - 6 絵合 明治25年 「うきめ見しそのおりよりも」
(参考) 源氏物語絵尽大意抄 天保8年(1837) 和泉屋市兵衛刊
 - 7 胡蝶 明治25年 「花そのゝこてふをさへや」
 - 8 螢 明治25年 「声はせて身をのみこかす」
 - 9 藤裏葉 明治25年 「春日さすふちの裏葉の」
 - 10 若葉下 明治26年(1893) 「夕やみは道たとたとし」
- ◎ (参考) 源氏五十四帖絵尽 文化9年(1812) 和泉屋市兵衛刊

II 絵師の心意気

- 11 花宴 明治25年 「いつれそと露のやとりを」
 - 12 須磨 明治25年 「うきめかるいせをのあまを」
- ◎ (参考) 源氏物語絵尽大意抄 天保8年(1837) 和泉屋市兵衛刊
- 13 乙女 明治25年 「をとめ子が神さひぬらし」
(参考) をさな源氏 二之下 乙女 寛文10年(1670) 山本義兵衛刊
 - 14 野分 明治25年 「風さはきむらくもまよふ」
 - 15 梅枝 明治26年 「花のかはちりにし枝に」
 - 16 横笛 明治26年 「よこふえのしらへはことに」
 - 17 東屋 明治27年(1894) 「さしとむるむくらやしけき」

III 物語の色調

- 18 朝顔 明治25年 「みしおりの露わすられぬ」
 - 19 夕霧 明治26年 「山さとのあわれをそふる」
 - 20 椎本 明治26年 「たちよらむかけとたのみし」
 - 21 早蕨 明治27年 「このはるはたれにか見せん」
- ◎ (参考) 雲母引き料紙刷りの早蕨
- 22 宿木 明治27年 「やとりきもおもひ出すは」
 - 23 浮舟 明治28年(1895) 「たちはなのこしまの色は」
 - 24 蜻蛉 明治27年 「ありと見て手にはとられず」
 - 25 手習 明治28年か 「身をなけしなみたの川の」

* 「 」内に色紙形の和歌初・二句を表記通り翻字しました

解題

I 典拠を捜す

京橋生まれの江戸っ子尾形月耕は、ほとんど独学で蒔絵の意匠から雑誌の口絵、本格的な日本画まで自在にこなした練達の絵師です。では、『源氏五十四帖』も造作なく仕上げられたかと言えば、決してそうではありません。古典に挑戦することの難しさ、しかも当時歴史的事実をふまえる作品が日本画の王道であったことを思うと、種々の資料を渉猟したであろうと推測されます。現在、器物・服飾・建築等の考証材料が何であったかはよくわかりません。しかし所謂粉本については、幾分判明します。調査の結論のみを示すと、全体の枠組みは『源氏五十四帖絵尽』およびその再版本『源氏物語絵尽大意抄』に従い、『絵入源氏物語』を基本として『十帖源氏』もしくは『をさな源氏』を参照し、さらに『源氏小鏡』をも見たと推測されます。

1 総外題 明治28年(1895)

厚手楮紙(奉書、縦36・2、横24・6糎)に卷子本と包みの意匠を刷る。卷子本の料紙に相当する部分には空押しの文様があり、目立たないが、垣根と梅の凝った図。絵柄は、下絵を施した料紙を卷子本に仕立て、源氏物語の巻名を書き入れて目録とする趣向である。若菜は上下の文字なく「若菜 若菜」と表記する。この総外題に刷られた巻序は通行のものと変わらない。しかし図を1枚ずつ見ていくと、13濔標・14明石と20乙女・21朝顔の2箇所逆順となっている。その事情は不明。この総外題は、54枚全ての刊行が終了して後、改めて制作されたものである。

2 桐壺 明治25年(1892)「いとけなき初もとゆひに」

料紙・寸法等は**1 総外題**に同じ(以下この事項の記述省略)。桐壺帝御前での光源氏元服を描く。絵柄は『絵入源氏物語』を忠実に踏まえており、「おはします殿(清涼殿)のひんがしの庇」の構図そのまま、源氏の前に置かれた冠も継承する。公卿達の衣装は『絵入源氏物語』では黒・白抜きの袍を黒・朱に置き換え、対応関係を崩していない。桐壺帝を御簾内に設定する他は人物の数が一致、姿態も概ね同じ。色紙型内に源氏香と当該巻の代表歌を刷り、布目打ち装飾を施す。当該巻の場合、絵と和歌とは対応するが、無関係の巻も多い。この布目打ちには幾種類かの型があったようで、空蟬では格子状のものと斜めに傾けたものの2種の版が確認出来る。

掲出の絵は当然『源氏五十四帖』の劈頭となる作であり、典拠通り描きあげる画面からは、連作開始に際しての謹直な姿勢を伺うことが出来る。『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』はこの場面を持たず、『十帖源氏』・『をさな源氏』に元服が描かれていても、図柄は全く異なるので、『絵入源氏物語』を典拠としたことはほぼ確実である。

(参考) 絵入源氏物語 桐壺 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊

紺色無地紙表紙(縦27.0、横18.2糎)の中央に楮紙片(縦12.4、横3.6糎)を押し、「きりつほ 一」と墨書。間合紙の原題簽は落剥し、現在後補の題簽である。巻によっては見づらいが、押発装を施す。本文は無郭、毎半葉11行21字程度の漢字平



仮名交じり。振り仮名・濁点・句読点および若干の傍注を付刻する。後述の絵と相俟って高く評価され、江戸時代を通じ源氏絵の基本文獻となった。丁のオモテ面ノドの部分に巻序・丁数を刻し、巻序はイロハを用い、元服の絵の丁は「イ二十四」である。

絵は片面と見開きの両様があり、4周単辺(縦18.9、横14.4糎)内に大和絵風の穏やかな図柄を彫る。刊行者山本春正(1610~1682)は当時著名の蒔絵師でもあったので、絵は春正自身の描くところと推される。春正はまた歌人・古典学者としても聞こえており、『絵入源氏物語』の他、『古今類句』36冊の大部な出版も手がけている。

版も手がけている。

この出版は『源氏物語』の読みやすい本文提供として画期的であった以上に、源氏絵の有力な典拠となって後続の版本・奈良絵本・絵巻の類にまで影響が及んだ。月耕の『源氏物語五十四帖』中では、桐壺以下少なくとも10枚が『絵入源氏物語』を粉本としており、参考とした可能性のある巻はさらに多い。近代における源氏絵の系譜を考える上で、有益な材料であろう。(左上図は『絵入源氏物語』桐壺、光源氏元服の場面)

3 帯木 明治25年 「かすならぬふせやにおふる」

光源氏からの手紙を読む空蟬と、その弟小君が描かれる。畳を敷いた室内・後ろの屏風・庭の木の素材は全て(参考) 絵入源氏物語 に一致し、空蟬・小君の姿態も同じ。僅かに異なるところは、『絵入源氏物語』の所謂吹き抜き屋台一「鶉籠」が由緒ある用語一構図に対し、月耕はより自然な遠近法を用いていること。

源氏香を地紋とする色紙形内の和歌「かすならぬふせやにおふるなのうきに有にもあらずきゆるはゝきゝ」は、第3句「なのうきに」が『源氏物語』諸本「なのうさに」と異なる。これは単なる誤刻か、根拠のある異文かは未勘。

4 若紫 明治25年 「手につみていつしかも見ん」

小柴垣の向こうで会話する「十ばかり」の若紫(紫の上)と少納言の乳母は、手前の光源氏に気付かない。相当近いところから垣間見している構図である。この巻では、ほとんどの源氏絵で雀の子が逃げる広々とした場面を描く。若紫・少納言のめのと・光源氏に限定し、かなり狭い空間設定を行っていて、特殊な粉本の存在を推測させる。同一の趣向は『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に見られ、光源氏の歩き方・手前の桜樹まで一致する。



なお色紙形内の和歌は、必ずしも絵と連動しない。梗概巻の場合、絵に対応するのは「生ひたたむありかもしらぬ若草をおくらす露ぞきえむ空なき」か「初草の生ひゆくすゑもし

らぬまにいかでか露のきえむとすらむ」である。また例の雀の子が色紙型右脇に添えられ、この巻の重要な点景であることを語る。(前頁は『源氏五十四帖絵尽』若紫)

5 花散里 明治25年 「たちはなの香をなつかしみ」

妻戸の前に立つ光源氏を見送る花散里。「西面にはわざとなく忍びやかにうちふるまひたまひて・・・なにやかやと例のなつかしくかたらひたまふ」その後朝なのであろう。これも源氏絵では珍しい構図を採用しており、通例では、麗景殿女御と昔語りをする光源氏が描かれる。色紙形内の和歌「たちばなの香をなつかしみほとゝぎすはなちる里に たづねてぞとふ」はまさしくその場面に对应し、当該の絵柄と関わりがない。

管見の範囲で一致するのは『十帖源氏』・『をさな源氏』である。月耕は、几帳隠れの花散里を大きく簀子に登場させており、典拠との差を見る。しかし構図の他、几帳・右上の時鳥・妻戸と金具などの道具立てが共通するので、影響関係は明らかであろう。

(参考) 十帖源氏 卷三 花散里 無刊記



縹色地に紗綾形・唐花等を型押しした紙表紙(縦27.5、横19.8糎)の中央に「十帖源氏 三」と刷った厚手楮紙題簽(縦17.1、横3.6糎)を貼る。第6冊題簽は落剥しているが、他は原装を保つ。各冊巻頭に目次、次いで本文每半葉11行22字前後、匡郭なし(印刷面縦19.5、横15.5糎程度)。漢字平仮名交じり、ままた注・傍注を付刻する。絵は4周単辺(縦19.2、横15.5糎)に全冊合計して131図。巻3には14図ある。撰者野々口立圃(1595～1669)自身の版下、巻1冒頭に石山寺伝説、巻10末尾に立圃の跋。

掲出本は無刊記だが、万治4年(1661)荒木利兵衛版もある。無刊記本は万治の刊記を削ったものと考えられるが、逆に無刊記本先行説も提唱されている。帙外題に「十帖源氏 寛文元年刊」と墨書が見えるけれども、寛文元年(1661)刊行の根拠不明。撰者が還暦を迎えた承応3年(1654)成立か。

立圃は書・俳諧・絵・古典学に通じ、雛人形制作を家業とした。『十帖源氏』撰述の後、寛文10年(1670)には『をさな源氏』を編む。『をさな源氏』には菱川師宣(?-1694)が絵を担当した版本もある。掲出本花散里の図と月耕の絵とを比較されたい。

6 絵合 明治25年 「うきめ見しそのおりよりも」

冷泉帝臨席の絵合。絵は「女房のさぶらひ(台盤所)におましょそはせて、北南方々わかかれてさぶらふ、殿上人は後涼殿のすのこに」に対応。この巻では絵合が藤壺女院の御前でも行われており、2度目の催しを描く。『絵入源氏物語』・『十帖源氏』・『おさな源氏』が絵の箱を御前に置くのに対し、**6 絵合**では軸物と絵巻があたかも反物のように処理されている。そして絵巻の扱い方、そして登場人物の数・男女の配置までもが『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に一致する。後者は畳の上に絵巻3軸を描き添えるので、月耕の絵は、これを持たない『源氏五十四帖絵尽』により近い。

(参考) 源氏物語絵尽大意抄 天保8年(1837)和泉屋市兵衛刊

藍色地に葵と源氏香の図を空押しした紙表紙(縦17.8、横12.0糎)。文様は薄れて確認が困難である。左肩に楮紙題簽(縦13.0、横2.5糎程度)を押し、朱の枠



と朱文字の「源氏物語絵抄」を刷る。見返しが半分欠けているので、他本によって補うと、「児女重宝(横書き)／近江八景の和歌／頭書源氏講釈入／源氏物語絵尽大意抄／溪斎英泉画／書肆甘泉堂梓」。巻頭3丁に天保丁酉(8年、1837)の序と石山寺伝説の多色刷り口絵、以下本文は絵及び各巻の代表的な和歌を下段に掲げ、頭注には『源義弁引抄』『紫文要領』『僻案抄』等を引き、啓蒙的な事項が多いものの、撰者の学識を窺うに足る。毎巻1図を半丁に収めており、先行する文化9年(1812)版『源氏五十四帖絵尽』では見開きと片面の両様の絵があるので、やや異なる。巻頭の3丁は厚手奉書風、本文より良質であるのは、多色刷りに対応するため。(左上は『源氏物語絵尽大意抄』絵合)

掲出本は、先行する『源氏五十四帖絵尽』を継承改刻したもので、当時人気の溪斎英泉が絵を担当した。小町谷照彦『絵とあらすじで読む源氏物語』(平成19年7月)は掲出資料の影印・解説のみならず幅広く関連資料をも俯瞰しているので、きわめて有益である。絵合の図は、人物の衣装こそ公家風だが、反物を扱う呉服屋の店先を連想させる。『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』とも基本的な構図はどの巻も同じなので、月耕の依拠した書物がどちらであるかは、特定しにくい。

7 胡蝶 明治25年 「花そのゝこてふをさへや」

鶴首の船を背景にした胡蝶姿の童舞。軽快な動きの舞と威厳のある船との対比構図は、「龍頭鶴首を唐のよそひにことごとしうしつらひて」と「蝶鳥にさうぞき分けたるわらはべ八人・・・蝶には黄金の瓶に山吹」の両場面の巧みな合成である。しかし「蝶鳥にさうぞき分けたるわらはべ八人」ゆえ、胡蝶は4人のはず。実際、丁寧に鳥4人・蝶4人の童を描く



のは『絵入源氏物語』、略して鳥蝶2人ずつ登場させるのは『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』、『十帖源氏』・『をさな源氏』が月耕の作と人数・構図共に一致する。ただし典拠の図柄を全て採用するのではなく上半分のみ使い、童の姿態を左右反転させる。(右上は『十帖源氏』胡蝶、童の上方に鶴首の船が描かれる)

8 螢 明治25年 「声はせて身をのみこかす」



庭の螢と衣を手にする光源氏、手前の女性は紫上か。この巻に取材する源氏絵では、室内に放たれた螢と困惑する玉鬘を描くのが定跡である。掲出の絵のように、庭の螢を素材とするのは極めて珍しく、また物語本文とも合致しない。源氏が衣装を持ち女君と対座するところから判断すれば、螢巻よりも玉鬘巻の衣配りの場面に適する。小町谷『絵とあらすじで読む源氏物語』は、源氏の手にある衣装で螢を包んだと考え、女君を玉鬘と見る。しかし『源氏物語』本

文の「螢を薄きかたにこの夕つかたいと多く包みて・・・えならぬ薄物のかたびらの隙より見いれたまへるに」とは整合せず、当該巻としてはあまりに不自然な画面であろう。

なぜ月耕はこのような描き方をしたか。それは、『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』を基にしたゆえと判断出来る。『源氏物語』本文を読んで描き上げたものではない、とすることにもなる。『源氏五十四帖絵尽』のどちらも同じ構図だが、これらは飛ぶ螢を描かないので、月耕の絵はより『源氏物語絵尽大意抄』に近い。この点、**6 絵合**とは逆である。また『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』まで遡って、不自然な図柄の理由を追尋する必要がある。(前頁は『源氏物語絵尽大意抄』螢)

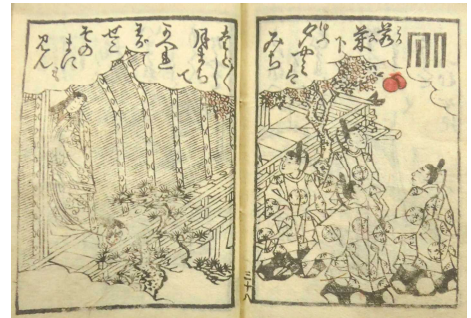
9 藤裏葉 明治25年 「春日さすふちの裏葉の」

内大臣邸における藤花の宴。庭に藤はないが、衝重(三方として描かれる)に藤の花を飾る。「非参議のほど、なにとなき若人こそ二藍はよけれ」の表現に即するならば、手前の人物が夕霧となろう。しかし絵の趣向からは、盃を手にする青年を18歳の夕霧と見たい。『絵入源氏物語』・『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』のいずれも同様の画面であり、絵からは粉本を決めがたい。

問題となるのが色紙形の和歌。「春日さすふちの裏葉のうらとけて君しおもはゝわれもたのまん」とあり、『源氏物語』中の歌ではないのである。『後撰和歌集』巻3からの引用をあたかも作中歌の如く掲げるのは、『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』であり、ここから典拠を推測しうる。次の**10 若菜下**の色紙形「夕やみは道たと √ し」もまた、引歌であり作中和歌ではない。

10 若菜下 明治26年(1893) 「夕やみは道たと √ し」

六条院南の町、寝殿の庭で蹴鞠に興ずる夕霧・柏木達と、御簾の内からそれを眺める女三宮。簀子に唐猫の後ろ姿を描く。「御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人気近くよづきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを」の前後を絵画化したものである。しかしそれは若菜上の終わり近いところに位置し、若菜下ではない。源氏絵としては不適切な絵画化であるが、色紙型の和歌「夕やみは」(『古今和歌六帖』第1)は作中歌ではないにせよ、若菜下に関



わる。引歌を作中歌の如く掲げ、しかも前の巻の絵を載せるの奇妙な作例を捜すと、『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に出会う。月耕『源氏五十四帖』全体の構想は、この先行著作によって大枠が定められたのであろう。

さらに遡ると、豆本『雛源氏』にまで辿り着くけれども、しかしそれは『源氏五十四帖』と絵柄の不一致が多いので、典拠とは見なしがたい。やはり『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』を水源とし、大きな流れとなったのが月耕の作と考えられる。『雛源氏』も含め引き歌の異同や絵の不整合についてなお知りたい方は、愚文「二つの『雛源氏』」(『むらさき』53輯)を御覧ください。(右上は『源氏五十四帖絵尽』若菜下、「夕やみは」の和歌を掲げる)

◎（参考）源氏五十四帖絵尽 文化9年（1812）和泉屋市兵衛刊

朱色紙表紙（縦9.1、横6.2糎）の左肩に藍色題簽（縦6.0、横1.6糎）を押し、子持ち杵と書名「源氏五十四帖絵（以下落剥）」を刷る。原装・原題簽の愛すべき豆本。伝本は割合少ない。内題「源氏物語五十四帖絵尽」。見返しと次の丁オモテの見開きに色刷りの石山寺伝説、そのウラより序・本文と続き、全57丁。ただし丁付は見返しを含んで「五十八」と刻す。刊記「文化九壬申／芝神明前三島町／和泉屋市兵衛梓」。この文化9年（1812）版を基本的に継承し、頭注を加えたのが『源氏物語絵尽大意抄』である。

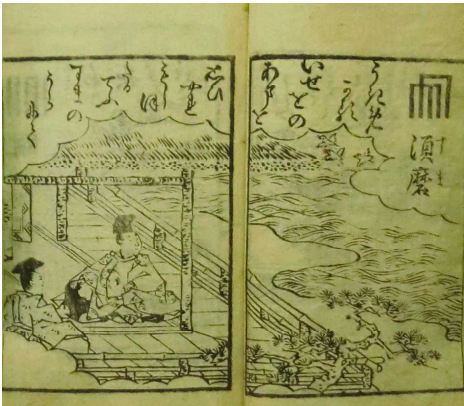
II 絵師の心意気

いくつかの典拠が明らかとなり、自ら『源氏物語』を読み込み自らの判断で『源氏五十四帖』を描いた、のではなさそうです。しかし今のところ粉本を突き止められない巻がいくつか存し、それらは月耕の独創と見られます。また既存の源氏絵を参照しながらも、新しい時代の感性と高い技倆によって、先行作例から鮮やかに離陸飛翔する画面作りもまた、大切な見所です。

1 1 花宴 明治25年 「いつれそと露のやとりを」

藤花の宴に招かれ、右大臣邸をそぞろ歩きする光源氏の酔い姿。高欄に「遅れて咲く桜」が散りかかり、簀子の朧月夜は憂い顔に源氏を見る。『源氏物語五十四帖』中最も美しく情感豊かな絵と言えようが、『源氏物語』本文にはまったく見られない場面である。そして、月耕が参考とし得た『絵入源氏物語』以下の版本類にも、このような図柄はない。物語に書かれていないことを絵にした**8巻**では、典拠として『源氏物語絵尽大意抄』を指摘出来るので、当該**1 1花宴**とは事情が異なる。したがって絵師の創作と判断されるが、これ以外に篝火・野分・総角・東屋も粉本不明であり、やはり月耕独自の発想によるものと見られよう。色紙形の和歌は当該場面と関係がない。

1 2 須磨 明治25年 「うきめかるいせをのあまを」



粗い造作の高欄に寄り、須磨の浦を眺める光源氏。都の瀟洒な建築と鄙の侘び住まいの差が木組みや色調の違いによって明瞭に描き分けられているので、**1 1花宴**の右大臣邸と比較していただきたい。典拠は、構図から『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』と推定される。前者は千鳥を、後者は海に浮かぶ白帆を点景とする。

掲出の須磨を見ると、千鳥・白帆が須磨の浦に描き添えられているので、『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』の両方を手元に置いたのかもしれない。粉本では光源氏の脇に従者がいる。そして、不遇の源氏を大きく描き、絵の主題を明確にするところが月耕の新しさであろう。源氏に朽葉色の地味な装束を着せているのは、この作だ

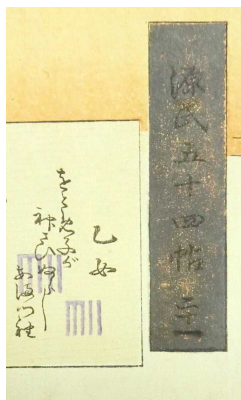
けである。(前頁は『源氏五十四帖絵尽』千鳥が舞う須磨)

◎ (参考) 源氏物語絵尽大意抄 天保8年(1837)和泉屋市兵衛刊

書誌的な事項については6の(参考)をお読みいただきたい。海を眺める光源氏は概ね立ち姿として描かれ、月耕の作が『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に近いことは12須磨の解題で触れた。竹と覚しき高欄に寄りかかる姿勢からすれば、『源氏物語絵尽大意抄』を典拠としたらしいが、千鳥・白帆の点景によると、『源氏五十四帖絵尽』をも参照したか。

13 乙女 明治25年 「をとめ子が神さひぬらし」

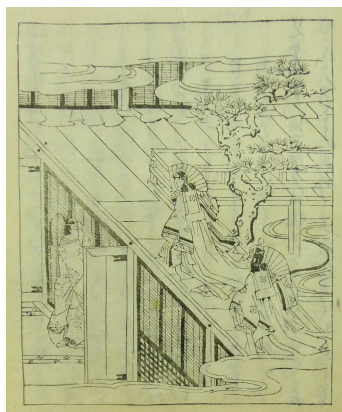
五節の舞姫2人とそれを御簾越しに見る夕霧。舞姫のうち1人は惟光のむすめであろう。緑色の御簾に影絵として夕霧を描くのが月耕の新しい趣向。『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』は5人の舞姫を描き一通例舞姫は4人、なぜ5人登場させたのかはお考え下さい一、『絵入源氏物語』は2人の舞姫だが御簾はなく公卿の数も多い。結局、舞姫の数が一致し、御簾や夕霧を描くのは『十帖源氏』・『をさな源氏』であるから、典拠をこの2書と推定出来る。



とは言え、月耕は依拠した絵の構図を左右逆転させ、さらに建物の外側に視点を設定して、先に述べた影絵の夕霧を登場させる。冴えた着想と言えよう。先行する絵画資料を粉本とする場合、構図の左右反転や一部切り取りによって新画面を作成することは、絵師の常套手段であるが、月耕の工夫は斬新秀抜なものとして評価出来る。なお夕霧は冠ではなく烏帽子着用なので、宮中を描いたものとは考えにくく、設定は六条院での舞習わしであろう。

なお『源氏五十四帖』では、掲出乙女の外題に「源氏五十四帖 二十」、18朝顔外題に「源氏五十四帖 二十一」とする。しかし勿論、正しい巻序は朝顔・乙女であり、なぜ順序を誤ったかは未勘。版元でも誤りにすぐ気付いたらしく、埋木して乙女の外題を「二十一」とする版がある。当然、朝顔の分も訂正されたであろう。(左上は、埋木訂正して「二十一」となった外題)

(参考) をさな源氏 二之下 乙女 寛文10年(1670)山本義兵衛刊



長編『源氏物語』を要約し、自作の絵を添えた梗概書。ゆったりとした版面や趣味性の高い挿絵によって、梗概書版本中屈指の佳作とされる。初心者あるいは女性読者から幅広い支持を得たらしく、寛文6年版以下、寛文10年版・延宝9年版10種以上の版がある。掲出本は寛文10年(1670)版、最終冊末尾に子持ち梓(縦17.6、横5.7糎)刊記「寛文十年庚戌歳春吉旦／書林山本義兵衛梓行」。野々口立圃の自著『十帖源氏』に依拠し、本文をさらに簡略化、絵122図を持つ。撰者及び『十帖源氏』については、5花散里(参考)を読みたい。

紺色無地紙表紙(縦27.0、横18.3糎)の左肩に厚手楮紙題簽(縦17.3、横

3. 5 糎) を押し、「おさなけんしきりつほより／ゆふかほまで一之上」の如く刻す。5 目綴じの原装美本。通常 5 冊仕立てであるが、掲出本は 10 冊に綴じ、特製本として制作されたか。本文匡郭なく、每半葉 11 行 21 字前後 (印刷面縦 19.5、横 15.5 糎程度)、絵は 4 周単辺 (縦 19.0、横 15.5 糎) とする。おおむね先行する『十帖源氏』より簡潔な図柄となっていて、両者の比較もおもしろい。乙女巻の場合、とてもよく似てはいるが、遣水や舞姫の表情に差が認められる。(前頁は『十帖源氏』乙女、展示の『をさな源氏』と比較してください)

14 野分 明治 25 年 「風さはきむらくもまよふ」

御簾を背にして立つ貴人。折れ臥す庭の秋草や風に舞う木葉を描き添える。風の動きに合わせて奥を暗くする描き方は、新しい造形感覚であろう。人物は光源氏の可能性もあるけれども、源氏が風に佇む場面は本文中にないので、その息夕霧と見ておく。場面が六条院か祖母大宮の住む三条邸かは、特定し難い。前裁の中に紫色の花が見えるので、「心とどめとりわき植えたまふ竜胆、朝顔のはひまじれる籬もみな散り乱れたるを」に取材する画面と考えることができれば、六条院北の町、明石御方の住まいとなる。その場合、色紙形の和歌とも適合する。

これも典拠が見つからない点において、**11 花宴**と同様である。月耕の独創か。

15 梅枝 明治 26 年 「花のかはちりにし枝に」

明石姫君の裳着をひかえた二月、薫物合を催す六条院に梅と松の紙包みが置かれ、光源氏は消息を書く。物語に該当するところはないが、朝顔の齋院から黒方が届けられたくだりの「散りすぎたる梅の枝につけたる御文・心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅・・・御硯のついでに」を参考としたかとも考えられよう。しかしこれは典拠の問題であって、類似の構図が『絵入源氏物語』・**10 若葉下**で触れた『雛源氏』・『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に見え、これらのいずれかを粉本としたのであろう。『絵入源氏物語』とそれを継承した『雛源氏』に紙包みはなく、源氏の前に梅や松の枝が無造作に置かれているのに対し、『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』では掲出の絵と同じ道具立てなので、こちらが基である。ただし、『絵入源氏物語』以下、全て源氏と螢兵部卿宮を描くのに対し、月耕の絵では風折烏帽子に狩衣の従者であり、齋院からの贈り物を届けた人物として登場させる趣向。

16 横笛 明治 26 年 「よこふえのしらへはことに」

落葉宮と母御息所が住む一条邸を訪れた夕霧は、柏木遺愛の横笛を譲られる。「こころみに吹きならず、盤渉調のなからばかり吹きさして」の本文に対応し、几帳の手前が落葉宮と母御息所であろう。笛を吹く夕霧は『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に登場するので、典拠が推定出来る。女性 2 人は『源氏五十四帖絵尽』に一致。ただし『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』いずれも落葉宮が琴を演奏する画面であり、掲出の絵で琴を描かないのと差がある。この絵でも月耕はコウゾの左右反転と視点設定の変更により夕霧の後ろ姿を描き、**13 乙女**ほど鮮やかで



はないにせよ、絵師の創意を看取出来る。なお、色紙形の和歌下句が「むなしくなりしねよりつきせね」となっており、通常の「むなしくなりしねこそつきせね」と異なる。誤刻か。(前頁は『源氏五十四帖絵尽』横笛、構図と視点が『源氏五十四帖』と逆)

17 東屋 明治27年(1894) 「さしとむるむくらやしけき」

九月、三条の小家に語らう薫大将と浮舟。「方違へどころと思ひて、小さき家まうけたりけり、三条わたりにさればみたるが、まだ作りさしたるところなれば」の隠れ家であろう。絵は「さればみたるが、まだ作りさしたる」とは逆の、ものふりた田舎家。物語の措辞とは整合しないものの、人物を点景として描き、晩秋のしみじみとした雰囲気の創出に成功している。

月耕は、人物や小道具の描写に長じているが、遠視点で大きく題材を捉えた時、風景画家としての優れた技倆も発揮される。掲出の絵は、**11花宴・14野分**と同じく粉本の見つからない作である。平安時代文学や伝統的源氏絵に独自の取材を行った、と言うより、江戸郊外の侘びた住まいが絵師の脳裏に浮かんだのではないか。『源氏五十四帖』中最も地味な、しかし味わい深い作品であり、月耕が宇治十帖をどのように捉えたかを推測する手がかりとなる。

III 物語の色調

月耕が手本としたことのほぼ確実に推測出来る源氏絵は、どれも墨刷木版でした。表現は素朴、彩色はありません。制作にあたって、平安時代に相応しい衣装・小道具・建築・風景など、大判錦絵に仕立てるための工夫を、月耕はさまざまに凝らしたと思われます。絵の色合いのみを取り上げますと、所謂正編は、失意不遇の場面であっても比較的明るく描かれ、心浮き立つ光景は、当然華やかな色彩が溢れています。ところが宇治十帖となりますと、渋く地味な色使いとなり、この変化から月耕の『源氏物語』理解を窺うことが出来るでしょう。

18 朝顔 明治25年 「みしおりの露わすられぬ」



二条院の光源氏と紫上、庭では童女が雪を転がしている。「雪のいたう降りつもりたるうへに今も散りつつ松と竹とのけぢめをかしうみゆる夕暮れに・・・わらはべをろして雪まろばしせさせたまふ」に対応する。色紙形の和歌は光源氏が朝顔の齋院に贈ったもので、絵と無関係。

掲出の絵については、同様の構図が『絵入源氏物語』・『十帖源氏』・『おさな源氏』・『源氏小鏡』に見られ、描かれた人物の数で明暦3年(1657)安田十兵衛刊『源氏小鏡』と一致する。『源氏小鏡』と近い絵は、他に薄雲・浮舟があるけれども、確実に粉本となったか否か、判断は難しい。月耕の作では、冬景色とは思えないほど画面が明るく、童女

の衣装も華やかである。ただし、あまり暖かそうではない。また悲劇の始発となる**10 若葉下**でも、あでやかな色彩・絵柄であることは共通する。宇治十帖を代表する沈んだ色調の作**17 東屋**とは対照的。

19 夕霧 明治26年 「山さとのあわれをそふる」

小野の山荘から「九月十余日」の野山を眺める夕霧。『絵入源氏物語』・『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に類似の構図を見、その中では『絵入源氏物語』が最も近い。『絵入源氏物語』は見開きの横長画面であり、それに依拠したとすれば、凝縮度の高い縦長画面に収めたところが月耕の技倆か。ただし、収穫時の田・引板・瀧・鹿など、『源氏物語』本文に忠実な描き方なので、独自に創作した可能性もある。

なお、色紙形の和歌「山さとの」はいかにも絵と調和しそうであるが、夕霧巻の冒頭近くに詠まれたもので、掲出の場面と関係はない。

20 椎本 明治26年 「たちよらむかけとたのみし」

故宇治八宮邸を訪れ、宿直人と語る薫。手前は女房か、あるいは大君・中君の姉妹いずれか。『絵入源氏物語』・『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』に類似の場面があり、画中に女性を描くのは『絵入源氏物語』のみだから、これを手本としたと見られる。ただし本文は「御うつり香もてさわがれし宿直人ぞ、鬢髭とか言ふつらつき心づきなくて」なので、宿直人の顔には髭があるはず、しかしきれいに剃り落としている。『絵入源氏物語』は物語に忠実な髭面である。

21 早蕨 明治27年 「このはるはたれにか見せん」

阿闍梨から宇治の山荘へ贈られた蕨を前に、中君は返事をしたためる。「蕨・つくづくしをかき籠に入れて」とあるその籠2つが簀の子に据えられ、寒々とした庭を広く描く画面は、押さえた色調で纏めあげられる。色紙形の和歌もこの画面に適するものであり、派手ではないが、優れた出来映えと言えよう。この絵は、欄外の刊記によると明治27年（1894）の刊行だが、翌28年以降には雲母引き料紙を用いて刷り増しされたらしい。

◎（参考）雲母引き料紙刷りの早蕨



書誌的事項は**21 早蕨**と同じ。刊記にも差はない。しかし料紙全体に薄く雲母を引いていることが、違いの一つである。『源氏五十四帖』は、明治25年（1892）初めより同28年（1895）4月までの息の長い出版であった。55枚の内、28年刊行分の料紙に雲母引きが見られるので、掲出の絵もおおよそその刊年が推測出来る。傍証として、雲母引き料紙刷りの版が**21 早蕨**より遅れた印刷であることは、瓢形落款「月耕」に版木の欠損が見られることから明らかである。またこの例は、再版にあたって刊記に手を入れないことをも語っており、書誌学上の参考となる。（左は雲母引き料紙刷り、右は展示の**21 早蕨**）

早蕨

22 宿木 明治27年 「やとりきもおもひ出すは」

宇治山荘の庭で深山木に手を伸ばす薫、長押には弁の尼。くすんだ色合いで宇治の晩秋を描き、「いとけしきある深山木にやどりたる蔦の色ぞまだ残りたる、こだになど少し引き取らせたまひて」の本文に整合する。色紙形の和歌もこれと対応しているが、「やとりきも」に作るのは通常の「やとりきと」と異なっており、誤刻か。類似の絵柄が『絵入源氏物語』・『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』等があり、典拠を定めがたい。

23 浮舟 明治28年(1895) 「たちはなのこしまの色は」

如月の宇治川に小舟を浮かべて対岸へ渡る匂宮と浮舟。「明け暮れ見出す小さき舟に乗りたまひて・・・有明の月澄みのぼりて水の面も曇りなきに、これなむ橘の小島と申して・・・されたる常磐木のかげ茂れり」に対応する。激しい恋情に駆られた匂宮と「つとつきて抱かれたる」女君浮舟を中心に描き、絵全体は静かな雪の夜景。寒々とした川面が印象的である。どの先行例もこの場面を持つので典拠は特定し難いが、彩色刷『雛源氏』を参考例として掲げておく。掲出の絵では雪や女君の顔を胡粉刷りとしており、絵の白い箇所には柔らかさと厚みを感じられる。(右上は『雛源氏』浮舟)



24 蜻蛉 明治27年 「ありと見て手にはとられず」

浮舟失踪後の夕暮れ、薫は飛び違う蜻蛉を見て詠嘆する。「あやしうつらかりける契りどもをつくづくと思ひ続けながめたまふ」に対応、色紙形の和歌もここで詠まれている。「かげろふ」を蜻蛉ではなく蜻蛉として描くのは、源氏絵の通例。色紙形の周囲にも蜻蛉を添える。舞台は豪華な都の邸宅であるはずだが、山荘と変わらないやや暗い色使いで画面を纏めており、宇治十帖全体の作柄に通底する表現と言えよう。

先行の源氏絵、『絵入源氏物語』・『源氏小鏡』なども掲出の作と同じ箇所を絵とする。それらの中では、『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』構図に近い。

25 手習 明治28年か 「身をなけしなみたの川の」

小野の庵室で文机に向かう浮舟、その脇に尼君が座る。小野の住まいは「作りざまゆゑある所、木立おもしろく前裁もをかしく・山に片かけたる家」であった。僧庵としては念入りな造作の建築を描き、山里の背景がなければ、さながら都の邸宅である。『絵入源氏物語』・『十帖源氏』・『をさな源氏』・『源氏小鏡』・『源氏五十四帖絵尽』・『源氏物語絵尽大意抄』全てに共通して類似の絵があり、典拠を定めがたい。しかし『絵入源氏物語』以下いずれも稲刈り風景を持つので、里近くの住まいである。他方『源氏五十四帖』は、より山深い場所を設定し、物静かな空間構成とする。山の端近くの空に薄く朱のぼかしを掛けており、日暮れ時を暗示したのは心憎い。

浮舟は長い髪のまま、かつ袈裟を付けていないので出家前の姿である。画面中、中央の文机にのみ濃く艶刷りを行って、軒先・半部の焦墨と共に、黒い景物が画中の人物以上に存在感を持つ。これも月耕の物語理解と関わろうか。